

# 崎門学報

第三号

平成 27 年 4 月 30 日

崎門学研究会



目次  
一面 『拘幽操』の精神を体現した菅原道真公  
現した菅原道真公  
二面 木村三浩氏講演録  
三面 崎門列伝③ 若林強齋  
五面 我観…対米自立こそ急務

## 『拘幽操』の精神を体現した

菅原道真公

至純の忠誠

『拘幽操』に示された「君君たらざとも臣臣たらざるべからず」という臣道の極致を我が国史上に体現した人物として真つ先に思い浮かぶのは菅原道真公でありましょう。道真公については、ある人その『菅家文章』や『菅家後集』に現れた詩文の才能を称賛し、またある人、蔵人頭から右大臣にまで上り詰めて宇多天皇による寛平の治を翼賛した政治的功績を称えます。さらには遣唐使の廃止を奏請し、国粹の風潮を促進した文化的功績を称える見方もあります。しかし崎門学者の平泉澄先生によると、これらの上述した道真公の功績は、詩文的には同時代の空海や大江匡房、政治的には藤原鎌足などと比べてずば抜けている訳ではなく、文化的には遣唐使の廃止も、国粹護持というよりは、行路の困難などが主たる原因であったようです。では道真公の真に偉大なる徳は何か。平泉先生いわく「その徳は実に至純の忠誠にあり、公の本質は実にその忠臣たるの所に存する」（『菅公頌徳録』北野神社編所収「至純の忠誠」）といえます。

これはどういうことでしょうか。

代々菅原家は儒者の家系であり、道真も儒者でした。その道真が公卿への出世の登竜門とされる蔵人頭に任命されたのは寛平三年（八九一）、四十五歳の時であり、以来彼は昌泰二年（八九九）までの僅か八年たらずで右大臣にまで上り詰めます。この異例とも言える道真の急速な出世は、家柄に囚われない能力本位の人材登用を思召される宇多天皇が、道真の非凡な才能を認められたからに他なりません。宇多天皇が道真を寵用することひとかたでなかったことは、天皇が醍醐天皇への譲位に際して下された『寛平遺戒』において、「右大将、菅原朝臣は是れ鴻儒なり。又深く政事を知る。朕、選びて博士と為し、多く諫正を受けたり。仍て不次に登用し、以て其の功に答ふ。しかのみならず、朕前の年に東宮を立てし日、只菅原朝臣一人と此の事を論定せり。其の時、共に相議する者一人も無かりき。」と述べられていることから伺えます。藤原氏などの門閥貴族が跋扈する朝廷のなかで、いくら寵臣とはいえ、右近衛大将（当時）に過ぎない道真が、東宮（皇太子）の廢立について、唯一人天皇からの相談を受けている

のですから、これでは彼が周囲の嫉妬や猜疑を招いたとしても不思議ではありません。現に、宇多天皇が醍醐天皇に譲位した後に出家したことで、道真が強力な後ろ盾を失うのを見て取った左大臣の藤原時平は、醍醐天皇に道真が天皇を排して自らの女婿である齋世親王を立て、国権をもつばらにしようとしていると讒言誣告し、これによって道真は、栄華から一転、大宰府権帥（長官）として九州への左遷を命じられたのでした。この時、道真の四人の子供たちも各地に左遷され、かくして彼の一家は離散を余儀なくされたのでした。

もともと、一般に大宰府長官などと言うと、左遷とはいえ高官でありますから、相応の待遇もあろうかと思われませんが、道真の場合、長官とは名ばかりで、実際には大宰府郊外の淨妙院という寺に幽閉され、雨漏りのために衣装を濡らして食べ物にも事欠く悲惨な境遇であったといえます。昨日まで大臣の位にあった者が、故なき失脚によって悲惨な境遇に際会すれば、誰しも主君を恨むのが普通でありましょうが、不思議なことに道真には自らの悲哀を嘆じることはあっても、主君を恨む気配は微塵も見受けられません。それどころか、かつて主君たる帝から頂いた恩寵に感謝し、帝への思慕の念はいや増す一方なのでした。それは道真が詠った次の詩

去年の今夜清涼に待す  
秋思の詩篇ひとり断腸  
恩賜の御衣今こゝに在り  
捧持して毎夜餘香を拝す

にも明らかです。去年の今夜は清涼殿の宴に参加していた。その時詠んだ「秋思」の詩を思い返すと断腸の思いである。またその宴の場で、宇多天皇から賜った御衣は今もここにあるが、毎夜これを捧げ持つて残り香を拝しているという意味です。故なき貶斥によって流遇にありながらも、ただひた向きに君を想い国を憂える、その心に我々は「君君たらざとも臣臣たらざるべからず」という臣道の極致を見出さずにはおけません。

## 道真の失脚は天皇親政の挫折

ところで、先に道真が蔵人頭に任命された際、彼はこの大任が一介の儒者に過ぎない自分には分不相応であるとして再三辞退を申し出ており、その後彼が右大臣になった時にも、かくのごとき異例の昇進は人心が受け入れず、身に禍をもたらしことなどを理由に罷免を奏請していたのでした。しかしひとたび道真が政務の采配を振るうや、その裁決は快刀乱麻、水の流れるごとくであり、帝の信任は強まる一方で周囲の嫉妬は免れませんでした。そこでこれを見かねたのか、三善清行は道真に手紙を送り、来年は運勢が変遷して凶や禍に遭いやすいからとの理由で引退を勧告

したのですが、道真はこれを聞き入れませんでした。これまで再三官職の辞退を申し出ていた道真が、今度は周囲の嫉妬をおして重任に励んだのは何故か。『皇朝靖献遺言』には、その理由を示唆する以下のごとき引用が記載されています。長いですが全文引用します。

「斎藤謙曰く、菅公の黜らるゝ、特（ただ）当時の不幸のみならず、王室万世の不幸なり。夫（それ）淡海閑院（淡海は藤原不比等、閑院は藤原内麻呂か冬嗣）外戚を以て鈞軸（政権）を秉（と）りてより、藤氏の権漸く盛に、天下皆藤氏有るを知りて、朝家有るを知らず。宇多帝之を患ひ、其権を抑へんと欲し、公を博士に擢（ぬきん）で、之を端揆に置く、公も亦慨然として天下を以て自ら任じ、忠を輸（いた）し誠に尽し、自ら恤（うれ）ふるに暇あらず。故に清行の規、肯（あえ）て従はず。右府の拝肯て辞せず、其藏人頭を譲り、閑白の命を辞するを見るに、公豈爵位を戀ふものならんや、誠に已むことを得ざればなり。此時に当りて、公一身を以て国家の盛衰に繫る、成ると否と天に在りて人に在らず、讒者の言固より顧るに暇あらず」。また「安積信の読史偶論に曰く、…神武帝より不業を興造し、以て清和帝に至るまで、凡そ五十六世、礼楽征伐皆人主に統べて、大臣権を専らにすることを得ず、清和帝冲齡にして踐祚し、藤原氏外戚を以て政を摂す。是に由りて礼楽征伐皆其手に出で、奕世（えきせい）相承けて以て

宇多帝に至る。帝天資英邁、藤氏の権を矯めて、之を人主に帰せんと欲し、群臣を環視するに倚杖す可べき者莫（な）し。独菅公以て大事を属す可し。故に之を儒素の中に擢で、不次超遷し、以て台鼎に至らしめ、又延喜帝と密議し、万機を菅公に委せんと欲す」と（横尾謙編『皇朝靖献遺言』広文堂書店）。

以上の引用が示しているのは、次のような事実です。すなわち、醍醐天皇が道真を抜擢し、また道真もこの信任に応えたのは、藤原不比等以来の外戚政策によって権勢を誇った藤原氏の専制を抑制し、神武建国の理想である天皇親政の実を回復するためであった。そのために彼は一身を以て国家の盛衰に任じ、天皇への忠義に殉じたというのです。道真の心事が奈辺にあつたかは別としても、道真亡き後に藤原氏の権勢が絶頂に達したことは事実であり、その藤原氏の干渉を避けるために白河天皇が院政を敷いたのを発端に、天皇と上皇に確執が生まれ、延いては保元平治と両者入り乱れての内乱の結果、いわば漁夫の利を得る形で武家が大政を篡奪したことを想えば、以後の七百年に及ぶ武家政治の淵源は道真の失脚に存するとは言えないでしょうか。

（折本 龍則）

## 一水会・木村三浩代表講演録

平成27年8月8日、高田馬場で一水会木村代表の話を聞いた。木村氏は先の鳩山元首相によるクリミア訪問を演出した、いわ

ば渦中の人物である。氏は、イスラム社会とも独自のチャンネルを持ち、最近ではシリアでイスラム国に殺害された後藤さんの亡骸を収集する為にヨルダンに赴かれた。そこで今回の話は、クリミア、ヨルダン方面に関するものであり、会場には後藤さんのご母堂も参加しておられたが、ここではクリミアの話のみを報告する。

今回の鳩山氏訪問に際し、政府は中止を再三要請した。それは氏の訪問がロシアによるクリミア領有の正しさを認めたことになるからという理由であった。しかし、ウクライナ政変でヤヌコビッチ体制が崩壊し、政権がプロシエンコに移動したことの合法性についての検証はなされていない。ヤヌコビッチは政変によって大統領選挙の前倒しを約したにもかかわらず、キエフ暴動以降の動乱によって政権を追われた。この暴動の背景には「マイン

ダイン運動」と呼ばれる過激な自由化運動があつたが、この運動は米國務次官補のビクトリア・ヌーランドが扇動していた。その際、ウクライナの動乱がクリミアに飛び火するのを防いだのは、プーチンではなく、クリミア住民であり、プーチンはこのクリミア住民による自主的な自衛措置を保護したに過ぎない。これを西側メディアは、プーチンがそののかしたロシアの侵略行為と断じて非難し、我が国のメディアもそれに追従したが、ウクライナ憲法第138条2項にはクリミア住

民の意思を尊重すると書かれている。今から23年前、ソ連崩壊によるウクライナの独立と同時にクリミアも住民投票を実施したが、その結果はロシアへの帰属を求める世論が大勢であつた。また西側はクリミアでスラブ人がタタール人を迫害していると言うが、ロシアへの帰属についてはタタール人の間でも意見が割れていることを報じていない。そもそも、二百年以上に亘ってクリミアはロシアの領土であつた。それを一九五四年にフルシチョフがウクライナに割譲したに過ぎない。つまり今回のクリミア併合は、歴史的領土の回復である。

ところが、これらの事実を我が国政府は自分の目で確認せず西側の認識を鵜呑みにして追従し対口経済制裁に参加した。これに、

## 近況活動報告

・平成27年1月21日、『崎門学報』第二号を発行。

・平成27年1月25日（日）、若林強斎先生の『雑話筆記』73〜80頁まで輪読（近藤啓吾先生校注の『神道大系 論説編13 垂加神道 下』収録）。

・平成27年1月29日（木）、若林強斎先生の『雑話筆記』（近藤啓吾先生校注の『神道大系 論説編13 垂加神道 下』収録）81〜91頁まで輪読。ついに読了。



へよって昨年予定されていたブーチンの訪日はキャンセルされ、北方領土問題解決の好機を逸した。政府は我々の訪問を非難したが、ならば政府自民党は自らクリミアに調査団を派遣して状況を確認したか。今回の訪問が、戦後における我が国の対米従属体制を打破する糸口になれば良い。

講演は凡そ以上の様な内容であった。これに対して愚生は、鳩山氏の国体観について質問した。というのも、鳩山氏は海外メディアから対米独立のナショナリストと紹介されているが、一方では過去に「日本は日本人だけのものではない」と発言しているので、身近に接した氏の感想を問うたのである。これに対しては、クリミアのアクシュノフ首相が鳩山氏との会談中、天皇陛下への尊敬を口にし、これに鳩山氏が謝意を表したこと等を紹介し、氏は謙虚なので我々の国体観を受け入れる土壌があると述べられた。



講演会の様子

## 崎門列伝③ 若林強斎 坪内隆彦

### 困学に屈せず

「あの天の神より下された面々のこの御霊は、死生存亡の隔てはないゆえ、この大事のもの、即今、忠義の身となして、君父に背き奉らぬ様に其なりにどこまでも八百万神の下座につらなり、君上を護り国土を鎮むる神霊となる様にと云より外、志はないぞ。じやよって、死生の間に頓着はない。どこまでも此天神よりたまわる幸魂・奇魂を持ちくずさぬ様に、汚し傷つけぬ様にするよりない」これは、若林強斎が享保十（一七二五）年に多賀神社（多賀大社）で行った講義『神道大意』の一節である。いかにして強斎は、この境地にたどり着いたのだろうか。

強斎は延宝七（一六七九）年七月八日に京師に生れた。父正印は寛永十五（一六三八）年十二月に、琵琶湖に面した大藪（現滋賀県彦根市大藪町）に生まれたが、その後佐和山に移った。正印は医を業としていた。

強斎が山崎闇斎の高弟浅見綱斎の門を叩いた時期ははっきりしていないが、近藤啓吾先生は、その時期を元禄十四（一七〇一）年か同十五年とすることが妥当だとしている。また、その経緯については、父正印の縁から綱斎の門を叩くようになったと推測している。綱斎の父道斎と兄道哲が京で医を開業してい

ただけではなく、綱斎自身も一時医を修めているので、同じように京で医を開業していた父正印と面識があったと考えられるからだ。

強斎は綱斎から崎門正統派の学問を授かった。しかし、強斎を取り巻く環境は過酷なものだった。父正印が眼を病んだため、強斎が一家の生計は支えなければならなくなったからだ。宝永六（一七〇九）年、強斎は天津の三井寺の別所微妙寺に住居を移した。そのため、強斎は綱斎の講義を聞くために、一日おきに天津と京都の間を行き来しなければならなくなった。夏には、衣服を汚さぬよう、刀の先に括りつけて担ぎ、襦袢一枚で通った。

そんな過酷な状況にもかかわらず、綱斎は厳しく強斎を指導した。その後、綱斎は「丈夫という者は新七（強斎）のことであろう」と言って強斎という号を与えたが、綱斎は、門人たちが、自ら克つことができる、真の強者になることを期待していたのだ。

父正印の生き様も強斎に強い影響を与えた。眼を病み、貧窮に陥ったものの、いささかも動揺することなく、子供たちの成長を娛しみ、強斎に三種の大祓と奉幣の儀とを伝えたのだ。強斎が、清貧に挫けず、常に従容としていたことは父の影響と見て間違いない。

神道に沈潜する晩年の闇斎の学問を綱斎が理解できなかったことは、強斎を苦しめることになった。闇斎が病床に伏すようになっても綱斎は見舞おうとせず、葬儀にも列するこ

とがなかった。強斎は、この綱斎の姿勢を「千万不屈デ、コレハ綱斎ノ門人タルモノ、血ノ涙ヲ流シテ嘆クハズノコト」と懺悔した。この懺悔こそが、強斎の学問の根底をなしている。

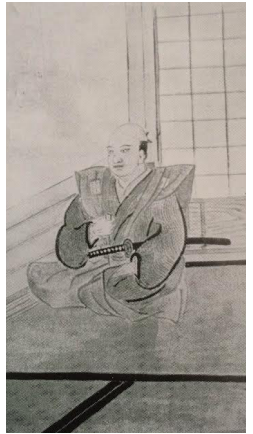
享保八年正月、強斎は多賀神社に詣で、七月には再び多賀社に詣で『神代巻』七代章を講じた。そして享保九年、強斎は闇斎以来の神道の諸伝を山本主馬から伝えられた。

この年三月には、強斎は多賀神社に詣で、同社の祠官川瀬元憲の邸内に「垂加霊社」を勧請した。さらに翌十年七月、強斎は主馬から霊社名「守中」と与えられた。闇斎の『風水草』にある「中者、君臣相守之道也、故為君臣之両祖」矣によったものだ。

「仮リニモ君ヲ怨ミ奉ルノ心発ラバ、天照大神ノ御名ヲ唱フベシ」

同年八月、強斎は多賀社に詣でて垂加霊社に拝し、闇斎の『風水草』の書写を開始するとともに、門下のために『神道大意』の講義を始めている。冒頭に挙げた一節こそ、強斎の思想の真髄を示すものにほかならない。

近藤先生が指摘されている通り、神道の伝授を得た後、強斎はわが身がわが国の生命につながるものであることを自覚し、わが心が天神の賜物に外ならないと自覚した。それは、「吾ガ心ヲ吾ガ心ト思ハズ、天神ノ賜ヂヤト思フガ、爰ガ大事ゾ。サウ思ヒナスデハナイ」という言葉に明確に示されている。



若林強齋先生

「天神」は思弁によつて作られたものでなく、我々日本人の共通の祖であり、吾人の生命の根源に外ならないことを、強齋は体認したのである。

近藤先生は「強齋は天神の賜物である我が心をいかにして清々たらしめるかの工夫に沈潜し、日々懺悔の生活に入る。……強齋はこれによつて風俗・言語・思想、これ等を一括してわが国の歴史そのものの具現である日本の生命への復帰を遂げ、その至純にして至烈なる信念が、その門流をして望楠実践の学に挺身せしめることとなるのである」と書かれている。

楠公に対する強齋の深い思いも、神道の伝授によつて固められた。

綱齋は楠公が死を急いだことを残念だとしていた。これに対して、強齋は、「定めてあそこに死なでならぬ其の時の事体なるべし」と述べ、楠公の死は絶望や反抗からの急ぎではなく、「生きかわり死にかわり、朝敵を亡ぼさん」との一念によるものだと考えた。

そして、強齋は享保九年頃、門人の山口春水から楠公の「仮りニモ君ヲ怨ミ奉ルノ心発ラバ、天照大神ノ御名ヲ唱フベシ」の言を聞

き、わが国臣子の目当てはこの一語以外にないことを確信したのである。

強齋は綱齋が歿した正徳元（一七一二）年から、その後を継いで子弟の指導に当たっていたが、享保九年頃、塾を「望楠軒」と命名し、自ら困苦を求め、その中でそれに打ち克つて学問するという闡齋、綱齋以来の学風を実践せんとした。

「望楠軒」には、山口春水、西依成斎といった多数の優れた門人がいた。その中に岐阜県揖斐郡出身の廣木忠信という逸材がいた。残念ながら、享保十五年に母の介護のため、美濃に帰省中、廣木は急逝した。その霊に強齋が捧げた祭文は、崎門の学風を鮮やかに描き出している。

「夏扇がず、冬爐に近づかず、艱難窮乏、日を合せて食ふ（食べ物がなくて、二日か三日目にやっと食べる」近藤先生訳）こと、時にこれ有り。賢、少しも屈せず、ますます勉めますます励む。而して余も亦た依れり（私も貴下を頼みとした）同。雪の朝、月の夕、相与に茶を瀹（に）、酒を浚め、経を議し義を論じ……」

そして、この後に続くのが「今を悲しみ古を慕ひ……」という言葉だ。まさにこの言葉は、幕府の専横、皇室の悲惨という現状を悲しみ、天皇親政の輝かしい時代を慕うという意味にほかならない。この志は崎門学派に脈々と受け継がれ、やがて維新の原動力となっていく。平泉澄先生は、「闡齋先生と日本精神」にお

いて、強齋以降の崎門学派を次のように称揚している。

「宝暦に竹内式部の処分あれば、明和に山県大弼藤井右門の刑死あり、高山彦九郎慷慨屠腹すれば、唐崎常陸介之につき、梅田雲浜天下の義気を鼓舞して獄死すれば、橋本景岳絶代の大才を抱いて斬にあひ、其の他有馬新七、西川耕蔵、乾十郎、中沼了三、中岡慎太郎、相ついで奮起して王事に勤め、遂によく明治維新の大業を翼賛し得たのであつた。

國體を明かにし皇室を崇むるは、もとより他に種々の学者の功績を認めなければならぬのであるが、君臣の大義を推し究めて時局を批判する事厳正に、しかもひとり之を認識明弁するに止まらず、身を以て之を験せんとし、従つて百難屈せず、先師倒れて後生之をつぎ、二百年に越え、幾百人に上り、前後唯一意、東西自ら一揆、王事につとめてやまざるもの、ひとり崎門に之を見る」

### 強齋が犯した不孝

平成二十五年八月二十四日、折本龍則氏とともに近藤啓吾先生のお宅にお邪魔した際、強齋『自首』のコピーを頂戴した。

#### 自首

不孝第一之子若林自牧進居、亡父二事へ奉養不屈之至、慚悔無身所措候。然尔身ヲ以、先生ノ号ヲ汚スコト、何ンノ面目ゾ

ヤ。

明日 亡父忌日タルニ因テ、自今日先生ノ偽号ヲ脱シ候。何レモ必不孝之刑人ト卑シク御アイシラヒ被成可被下候。已上

享保十七年壬子正月八日丙寅

#### 過廬陵文山

近藤先生の「若林強齋先生『自首』文を拝読して」（『若林強齋先生』）によると、本文の意味は、「私は亡父に事えて奉養不屈の至り、不孝第一のものであつて、漸悔身の措くところがなく、されば、明日が亡父の忌日であることを辞退いたします。不孝の刑人と卑しくお取りあつかひ下されたく御願ひ申し上げます」というもの。

この自首は、強齋が亡くなる享保十七年正月二十日から、わずか十二日前の正月八日に、神前に捧げられた文である。すでに強齋が自らの死を覚悟した状況下で書かれた。文末に記されている「過廬陵文山」（廬陵を過ぐるの文山）は、死を覚悟した時に文を残した文山（文天祥）の心境を想つて、自らの心境を一層明白にしたものである。では、不孝とは何か。近藤先生は次のように推測されている。〈父の願ひは、若林氏がもと武士であつたことを思ひ、先生がいづれかの藩に事へ、再び武士として世に立つことであつた。しかる

に浅見綱斎の教へを受けて既に幕府の存在を否定してゐた先生には藩に事へる意がなかったが、父の断つての希望に、その旨ひたるを幸ひとして、武士に取り立てられたと偽り、喜ばしめたことであつた。そして父は寶永七年、先生三十二歳の時、孝養を尽し得ざるに病歿したのである。このことは先生がその生涯、心より消すことができぬ慚悔であり苦悩であつた。いふなれば先生は、これによつて「不孝第一」といふ意識の十字架を背負つてその生涯を送らねばならなかつたのである。強斎は、最期まで天神の賜物である自らの心をいかにして清々たらしめるかの工夫を続けたのである。

## 自首

不孝第一と云ふ筆自持進居  
二父三事、奉養不届至  
慚悔世々所措おれん  
アイレラ、必くうけとよ  
日先生、何シ面目ヤ  
明、父忘日タレ因テ自今  
不孝之、前人ト卑シヤ  
アイレラ、必くうけとよ

強斎の『自首文』

享保十七年正月八日

西原屋文山

## 我観・対米自立こそ急務

### 折本龍則

#### TPPのねらい

目下進行中のTPP交渉が大詰めを迎えているとのことであるが、小生は頭が悪い上に世間の部外者なので、このTPPが何なのか未だによく分からない。TPPは自由貿易協定であるから、その主たる内容が財市場の自由化にあることは間違いない。アメリカとしては、農産物をはじめとする生産物の輸出を増やして貿易赤字を減らすと共に、雇用を創出して失業者を減らすのが狙いであろう。しかしある識者が言っていたアメリカのもう一つの狙いは、我が国の金融市場の自由化であるという。これは財市場における関税障壁に対して、保険や共済などのサービス業における非関税障壁の撤廃が目的とされているようだ。たしかに、我が国は郵政や農協、国民皆保険制度によつて金融市場が統制され、外国企業による自由な参入が規制されているのは聞いたことがある。よつてアメリカとしては、一千二百兆円と言われる我が国の金融資産にアメリカの保険会社がアクセスできるように、TPPによつて規制緩和を促したいと言う思惑があるのだろう。

#### 高圧政策の背景

TPPは、一九七〇年代以降におけるアメリカの近隣窮乏化政策、そして一九八〇年代以降における国際的な金融市場の自由化政策の延長と見ることもできるのではないか。戦後のアメリカは自由主義陣営の盟主として、国内市場を開放し、富裕な最終消費市場になつたが、次第に復興と高度成長を遂げた日独に国内製造業を侵食され、貿易赤字は拡大する一方であつた。また戦後の福祉国家政策に加えて、ベトナム戦争の長期化は、財政赤字の拡大を招き、かくしてアメリカは深刻な「双子の赤字」に苦しむことになつたのである。アメリカ経済の矛盾は、ニクソンショックとして表面化し、ニクソンは中共と組んでソ連を牽制することによつて、衰退期の外交を乗り切ろうとした。日米繊維交渉で思い出される様な日米貿易摩擦が発生し出したのはちょうどその頃である。当時アメリカの対日姿勢が硬化したのは、米中宥和の中で日米関係の重要性が低下した事情と無縁ではなかつた。

さらに80年代に入りアメリカでネオコンが主流を占めると、彼らは製造業における優位を放棄して、ソ連に対する軍事的優勢を背景に、「同盟国」に対する露骨な構造改革とそれによる金融市場の自由化を要求し始めたのである。こうした要求は冷戦終結によりアメ

リカがユニラテラリズムに傾斜して行くとつてエスカレートした。89年に日米構造協議が始まり、冷戦終結後の94年には悪名高い「年次改革要望書」が手交され始めたのはそのためであり、目下進行中のTPPは、こうした一連の対日政策の延長線上に位置するのである。

#### アメリカにすり寄る日本

この四半世紀に亘りアメリカが我が国に対して高圧姿勢に転じたのは、他でもなく我が国の軍事的重要性が薄れたからである。本来であれば、そのタイミングで自民党政権は自憲法を制定して日米安保を見直し、真の独立を回復すべきであつた。しかし彼らは逆に「おもしろい」と称して、在日米軍の駐留費用の過半（約七割）を負担し、アメリカに擦りよつてその庇護を懇願したのである。安倍政権は、アメリカへの協調ならぬ従属が、我が国の安全を保障し、経済を立て直す唯一の方策であると考えているようであるが、残念ながらそうした目論見は、近年におけるチャイナの軍事成長と覇権主義的な海洋進出に対して殆ど無効であることを思い知るだろう。というのも、現在のアメリカにとつてチャイナは日本に勝るとも劣らない経済的相手国であり、米国債の保有比率は今年の二月に久しぶりに日本が首位に返り咲いたものの、それまでの6年半はチャイナが首位であつた。貿易面でもアメリカにとつてチャイナは第一の



輸入先であり、輸出先として地位は日本よりも高い。こうした状況下で、アメリカが日本のためにチャイナとの経済利益を犠牲するとは考えにくい。むしろ日本には二枚舌を使つて対日防衛を約束し、その一方でチャイナへは宥和政策を進めてその海洋進出に対する有効な対策を怠る公算が高い。二〇一三年の末にチャイナが一方的に防空識別圏を設定し、航空会社には飛行計画の提出を求めたのに対して、オバマ政権はこれを無視してB・29を防空圏内で恣意飛行させた一方で、国内の航空会社には飛行計画の提出を命令した如きダブルスタンダードは、彼の国伝統の二枚舌外交の一例である。かくしてアメリカはチャイナを野放し、かつての孤立政策に回帰しつつある。

## 「リバランス」1・自主防衛

ジョージ・ケナンやヘンリー・キッシンジャーといった戦略家も同じことを言っていたが、アメリカは建国以来のリベラルな原則を外交に持ち込むために、現実への合理的な視点を失い、かえつて問題をややこしくする傾向があるようだ。第二次大戦前も支那への「門戸開放主義」に固執するあまりに我が国を過剰に追い詰め、結果的にはコミンテルンに漁夫の利を与えた。中東でも、イランとイラクを競わせる代わりに、サダム・フセインを破滅させた結果、イランに漁夫の利を与えたばかりか、イスラム国の台頭を許した。これら

は全て理念先行によるアメリカ外交の失敗であり、彼らは同じ過ちを極東でも繰り返す可能性がある。これはアメリカが理念国家であるが故の宿弊なのである。安倍首相は先日のアメリカ議会における演説の中で、アメリカのアジアにおける「リバランス」を歓迎し、「日米同盟」を「希望の同盟」と讃えた。しかしアメリカがTPPを主導し、我が国が集団的自衛権を行使しても、畢竟そんな小手先の対策はチャイナに対する有効な抑止にはならず、むしろ我が国における従来 of 対米従属に拍車をかけるだけである。大国間の勢力均衡が、核の「相互確証破壊(MAD)」によつて辛うじて成立する戦後の国際環境において、アジアのリバランスとは、我が国が核戦力を構築し、自主的な抑止力を保持することに他ならず、さもなければ「日米同盟」は、米中の狭間に我が国を埋没せしめる「絶望の同盟」になるだろう。しかしながら、一九五三年のアイゼンハワー大統領による「平和のための原子力」演説以来、アメリカは原子力の平和利用を促進し、我が国に原発技術を提供する代わりに原子力の軍事転用を禁止し、NPT条約によつてそれを明文化した。つまり我が国はエネルギー供給源を原発に依存する限り、NPT体制に従わざるをえず、核戦力の構築は不可能なのである。

## 「リバランス」2・日口同盟

チャイナに対するもう一つのリバランス

は、日露関係の正常化である。我が国はロシアとの間に北方領土問題を抱えており、戦後70年を経過せんとする現在においても講和条約は締結されておらず、そのため両国間の経済協力も限定的である。しかし我が国が原発エネルギーへの依存から脱却を目指す上で、ロシアが保有する石油や天然ガスに対する需要は高まっている。またロシアも、折からのエネルギー価格の下落や欧州市場の縮小によつて収入が減り国家財政が悪化しているのみならず、シベリアやサハリンなどの極東開発を進める上で、我が国からの投資やハイテク技術の導入を必要としている。中口関係も表面き良好であるが、ロシアは内心で長大な国境を接する中国を警戒している。この様に両国の利益は一致しているのである。そんな中、二〇一三年四月の日口首脳会談によつて両国関係は好転の兆しを見せ、昨秋にはプーチンの訪日も予定されていたが、ロシアのクリミア編入に対するアメリカの経済制裁に我が国が追従したことで、プーチンの訪日は延期され、日口平和条約交渉は中断してしまつた。

ところで懸案の北方領土問題に関しては、一九五一年、当時の鳩山一郎首相が訪ソし、日本が国後島と択捉島を含む千島列島を放棄し、色丹島と歯舞群島の返還によつてソ連と平和条約を締結しようとしたのに対して、アメリカが横やりを入れ、ダレス国務長官が重

光葵外相に対して、「日本が二島返還で決着させるなら、沖縄は永久に返還しない」と恫喝した経緯(ダレスの恫喝)がある。以後、我が国の外務省は、アメリカの意向を忖度して、一貫して、四島一括返還を主張し、その結果、今日に至るも、日口平和条約は締結されていない。もつとも、未だ中国が揺籃期にあつた半世紀以上前と今ではアジアの戦略環境は大きく変わつており、日口関係の強化はアジアのリバランスを標榜するアメリカの戦略的な利益とも合致するであろう。よつて我が国政府は、こうした時局の推移を見極めて従来の思考停止による対米従属から抜け出し、独自の国家意思を発揮すべきだ。先般、一水会の木村代表が鳩山元首相を引き連れてクリミアを訪問したのは、対米従属に堕した政府を激励し、上述の如き政策転換を促す義挙であると信じている。

### 内容の要約

- ・TPPの真意は金融市場の自由化である。
- ・「日米同盟」はアメリカにとって重要ではない。
- ・アジアの「リバランス」とは自主抑止力の構築を意味する。
- ・米中野合の趨勢に対し、我が国は日口関係の打開を以て対抗すべきである。
- ・上述した自主抑止力の構築も日口関係の打開も、その最大の障害物は対米追従政策である。

# 崎門学研究会